

【事業実績】

美術による人材育成事業として、学校・地域・美術館において多数のワークショップを実施した。全ての人々が楽しめる美術館及び美術館の教育普及プログラムの確立を目的として、特別支援学校プロジェクトを実施。美術のもつ柔軟性を活用して、複数の分野にまたがる内容の講座を開催。「科学者と表現者」として、県内外から多彩な講師を招聘し、レクチャーを実施。先生のための講座を幼稚園・こども園・小学校・中学校等の教員を対象に実施した。地域美術館体験は、豊後高田市のみで開催であったが、地域の歴史・文化資源をテーマとしたコレクション作品選定のため、学校や園の児童とともに、地域の大人までもが本物にニレク機会となり、美術と美術館への認識が広がった。

1. 地域文化の発信の核となる博物館

(1) 美術作品を活用した地域ぐるみの美術館体験講座

①地域美術館体験講座

○今年度は、豊後大野市と豊後高田市の2か所にコレクション作品を運び地域美術館体験講座を行う予定だったが、新型コロナウイルスの為、豊後高田市のみで実施した。

○のべ8日間の会期中、実施した子ども対象の鑑賞ツアーに一般を含め842名が来場した。

○子ども対象の鑑賞ツアーは、市内の公立・私立の幼稚園・こども園の4～5歳児/8回/169名、小学校/15回/263名、中学校/10回/179名（小・中学校の学年は学校による）が参加した。

○展示は国東半島の神仏にちなみ、祈りや歴史をテーマとした作品を中心に、コレクション作品から歴史の面影を感じる作品を展示した。ガイドスタッフと「一緒に見る」スタンスの鑑賞ツアーは、作品と同じポーズをとることや、手の隙間から作品を覗くことで明るい色を確認することなどを行い、園児から中学生まで能動的に作品と接する姿勢が見られた。



豊後高田市立高田中学校



封戸保育園



豊後高田市立河内小学校

2. 学校教育との連携による地域文化の担い手育成事業

(1) 将来の文化の担い手育成する担い手育成講座

①美術に親しむための学校ワークショップ

○学校ワークショップは、美術館から学校に出かけるアウトリーチ/出前ワークショップと、学校でのワークショップと美術館での鑑賞をセットで行う往還型プログラム「びじゅつかんの旅じたく・旅」を実施している。今年度はアウトリーチ/出前ワークショップは81回/1952名の参加があった。一方、「びじゅつかんの旅」は18回/460名の参加、「びじゅつかんの旅じたく」は25回/663名の参加があった。例年、学校から美術館に来る「びじゅつかんの旅」の交通手段は各学校で手配していたが、今年度はバスを用意することができたので、多くの参加があった。しかしコロナ禍の為、出前ワークショップは3回、びじゅつかんの旅は6回キャンセルがあった。とはいえ、学校ワークショップの総数は、77校、のべ124回/3075名が参加でき、県内各地の学校等での美術体験と大分県立美術館での美術館体験を行うことができた。

○美術館に来館した学校・園に対しては、美術館のコレクション作品の鑑賞体験を中心に、場合に

よっては企画展の鑑賞をも含めた美術体験プログラムを実施した。美術館まで来ることが困難な学校・園に対しては、スタッフが出かけて行き、体感型ワークショップ、工作型ワークショップ、絵の具ワークショップ、そして当館教材としての作品を持っていく鑑賞型ワークショップを行った。○新型コロナウイルスの影響のため、申し込みをしたがキャンセルした学校は、出前ワークショップで3校、びじゅつかんの旅で6校あった。



白杵市立下北小学校



大分県立鶴崎工業高等学校



日田市立大山中学校

②中・高生担い手育成講座

○中学校美術部 24 名が1日まるごと美術館で過ごすプログラムを実施した。午前中は美術館の建築からコレクション展示室までを鑑賞。午後は教育普及教材の彫刻をモチーフに共同制作を行った。普段の美術部の活動は個人の制作が中心なので、全員での鑑賞と体感、そして共同制作と、異なる美術を体験することができたと、新たな刺激を得ていた。



ギャラリーツアー



共同制作



ライトアップ

○小学生の時に美術館のワークショップに参加したことのある双子の姉妹が、同じようなワークショップをクラスみんなにも参加してほしいと、学校を説得して実現した。このワークショップでは、ある描かれた絵からイメージして作曲された曲の演奏を聴きながら、再びその曲からイメージされる最初とは異なる絵を描き、さらにその絵から曲が生まれるという連続性を持ったものを実施した。今回は企画をした姉妹が小学4年生の時に描いた作品から作曲された曲をミュージシャンが生演奏を行い、50名の中学1年生が思い思いにコラージュ作品にした。さらにそのコラージュ作品を一行にならべ、即興演奏も行った。音楽と美術が連続して行われる、新しい表現を感じた中学生だった。



初めに演奏を聴く



曲を聴きながらコラージュ



作品からの即興演奏

③大学と連携したアートマネジメント講座

○当初、外部講師を招きアートマネジメント講座を開催する予定だったが、実行委員会委員でもある大分県立芸術文化短期大学の先生とアートマネジメントについての協議をする中で、コロナ禍もあり、学生には実践する場がないとの意見をいただき、今年度は当館で開催しているアトリエ・ミュージアムの枠の中で、学生が企画した一般向けのワークショップを実際に行うことにした。学生が二つのグループに分かれ、企画から当日の進行とその準備を行い、各々ワークショップを実施した。

○通常アトリエ・ミュージアムは午前・午後の二回に分けて実施しているが、来館者対応のワークショップのため対象者が何時、来るかはわからない。昼間も継続して行いたいと積極的な申出があり、交代で休憩を取りつつ行った。

○一回目のワークショップはのべ47名が参加、二回目は午前13名、午後14名が参加。社会と美術を結ぶその仕組みの中、人とのコミュニケーションが要ということを感じた学生たちだった。



「せっけんをつくろう！」



「カスタネットをつくろう！」

④指導者・先生のための講座

○大分県立美術館では、県教育委員会からの依頼に基づく教職員研修の他、美術館が主催・実施する教職員研修として、「先生のためのワークショップ」と題して、ミュージシャンを講師に招聘して行った。現役の小学校の教員その他、大学で教職員を目指す学生、および大学の教育学部の先生が参加した。内容は「音と形を楽しむ」と題し、音楽と美術という学校では異なる科目が、融合するようなプログラムを行ったところ、「そのまますぐに授業で取り入れられる」、あるいは「授業のヒントになった」と好評を得た。

○通常、こうした講座では3時間、50名程度の受け入れで実施するが、今年度は新型コロナウイルス感染防止を考慮して、2時間/29名で実施した。



様々な造形素材で音を奏でる 二人一組で会話するように音を出す

全員でセッション

3. 社会人ほか多様な対象者のための学習講座

(1) 新たな美術ファンを増やすための社会人向け講座

- ①大分の芸術文化・科学など新たな視点を提供する講座・セミナー
(STEAM 人材育成講座を含む)

○新たな視点を誘発するため、国立科学博物館の研究者と画家、デザイナー、舞踏家などの表現者との対話形式の講座を5回開催、のべ158名が参加した。科学博物館の研究者からは地質・天文学、人類学、植物学などの専門的な話と、作品のモチーフが共通する表現者がそれに呼応した話をする相互的なやり取りは、参加者のみならず登壇者にとっても未知なる出会いとなった。参加者からは、「大変良い刺激になった」「ぜひ、このような講座は継続してほしい」という声が寄せられた。参加者はあらたな視点から美術を捉える機会となり、興味・関心が高まった。

○通常、こうした特別講座では3時間、50名程度の受け入れで実施するが、今年度は新型コロナウイルス感染防止を考慮して、2時間/35名の受け入れで実施した。



門馬綱一(鉱物学)×山崎哲一郎(画家)



篠田謙一(分子人類学)×菊地びよ(舞踏家)



洞口俊博(天文学・宇宙科学)×小川信治(画家)



細矢剛(菌学)×青木美歌(美術家)



宮脇律郎(結晶学)×中嶋浩子(アーティスト/デザイナー)

②美術に関心をもってもらうための講座

○「What's Museum? “みる”を楽しもう！」と題し、身近なモノや歴史的なモノを、自分の視点で楽しめるような講座を開催した。前半では大分県立美術館の紹介や福岡市美術館の移動式教材ボックスを使った「どこでも美術館」を開催し、美術館のコレクション普及活動を知ること、美術と美術館の活動に対する認識を広げた。後半は、大分歴史博物館の民俗資料から竹細工130点を用いたインスタレーション展示を行い、歴史・民俗資料を美術的視点で楽しむ講座を行った。のべ12回の講座で145名の参加があり、参加者からは「福岡市美術館にもいってみたい」「大分県立美術館以外の美術館にもいきたい」「久しぶりに大分県立歴史博物館に行きたくなった」など、美術館・博物館での鑑賞意欲が強くなったとともに、「竹工芸ではなく竹細工も視点を変えれば芸術的だと感じた」など、あらたな視点を獲得した参加者が目立った。

○通常、こうした特別講座では3時間50名程度の受け入れ、子どものコースは2時間/30名受け入れ実施するが、今年度は新型コロナウイルス感染防止を考慮して、それぞれ2時間/35名、1時間/10名の受け入れで実施した。



福岡市美術館「どこでも美術館」



竹細工によるインスタレーション



竹細工の歴史と造形について語る

4. 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援

(1) あらゆる人が美術館を楽しむ美術館プロジェクト

①視覚や聴覚等に障がいのある児童生徒が美術館を楽しむ特別支援学校プロジェクト

○アウトリーチ/出前ワークショップは聾学校幼稚部、支援学校小・中学部のべ5回/39名に対して実施、「びじゅつかんの旅・旅じたく」では聾学校小・中学部、支援学校高等部のべ4回/72名に対して実施した。出前ワークショップでは「学校では体験できない活動を通して、子どもの積極的な姿が見られた」、「びじゅつかんの旅」では「真剣に作品を見る姿が見られた」等の意見が教職員から出された。



聾学校小・中学部



大分支援学校高等部



別府支援学校

②言葉とイメージのワークショップ

○新型コロナウイルスの影響を考慮して中止

総括

新型コロナウイルス感染防止対策のため、昨年の3月から休館・講座の中止を余儀なくされていた美術館は、4月6日に一度再開したものの、全国的な緊急事態宣言にともない、再び4月16日に休館した。その後、5月11日に感染防止対策を実施の上で再開館し、美術館内で行う各種講座は事前申込・少人数・時間短縮・内容検討を行い再開した。この新型コロナウイルスの影響は計り知れなく、地域美術館体験講座は、地域の事情等により一部開催できなかった。予定どおり開催した豊後高田市では、アウトリーチ事業である出前ワークショップを行った幼稚園・小学校の児童が会場に訪れ、学校でのワークショップと美術館での鑑賞を組み合わせた往還型プログラム「びじゅつかんの旅・旅じたく」と同じような構造となり、昨年度より一層深い美術体験を得ることができた。

「びじゅつかんの旅」では新型コロナウイルスの影響のため想定内の応募にとどまり、応募のあった全てが実施可能だったが、残念なことに感染の再拡大などの状況をみてキャンセルした学校もあった。一方、アウトリーチ型の出前ワークショップの応募は想定より非常に多く、少しでも多くの学校・地域へ行きたいと願いつつも、全ての学校での実施は不可能で、次年度以降に持ち越しとなった学校もあった。出前ワークショップをはじめ、当館の活動が年々知れ渡ってきている一方、今年度は感染のリスク

回避から新型コロナウイルスの感染者が比較的多く発生していた大分市内にある、大分県立美術館への移動を避けたのではないかと考えられる。

これら学校ワークショップの総数は、同じく学校を対象とした中高生担い手育成講座や地域美術館体験講座を含めると、県内各地、176回/3,760名の子どもたちに、美術体験の機会を提供することができた。ワークショップでは身体と感覚を能動的に動かす姿と笑顔、そして作品を見つめる真剣なまなざしは、「作品を見るのが楽しい」「また美術館に行きたい」という多くの感想と結びついた。一方で、地域美術館体験講座とアウトリーチを積極的に組み合わせて行くという新たな課題も見えてきた。新型コロナウイルスと共存していかなければならないこのような時代だからこそ、美術の力で子どもたちの未来を切り開きたい。



大分県立鶴崎工業高校



大分県立鶴崎工業高校



宮河内幼稚園



宇佐市立天津小学校



杵築市立東小学校



玖珠町立北山田小学校



別府支援学校中学部



ことぶき幼稚園